

68 66歳の男性。胸痛を主訴に来院した。40歳から高血圧があった。その後、職場での健康診断は受けていなかった。半年前から通勤時に息切れが出現していたが、放置していた。今朝から強い胸痛が出現し、自宅で安静にしても改善しなかった。意識は清明。息切れが強いが、咳と痰とは認めない。身長168 cm、体重76 kg。体温36.5℃。脈拍100/分、不整。血圧180/96 mmHg。心音はⅡ音の亢進と心基部での収縮中期雑音を認める。背部両側下部で吸気時に coarse crackles を聴取する。右肋骨弓下に肝を4 cm 触れる。尿所見：蛋白3+、糖2+。血液所見：赤血球350万、Hb 9.5 g/dl、Ht 28%、白血球5,600、血小板15万。血液生化学所見：血糖210 mg/dl、HbA_{1c} 8.0%、総蛋白5.6 g/dl、アルブミン2.9 g/dl、尿素窒素60 mg/dl、クレアチニン5.3 mg/dl、尿酸8.2 mg/dl、総コレステロール240 mg/dl、AST 10 IU/l、ALT 6 IU/l、ALP 280 IU/l (基準115~359)、Na 138 mEq/l、K 5.6 mEq/l、Cl 104 mEq/l、Ca 6.8 mg/dl、P 6.2 mg/dl。CRP 0.3 mg/dl。

診断のために必要なのはどれか。2つ選べ。

- a 心電図
- b 尿培養
- c 喀痰培養
- d 胸部エックス線撮影
- e 尿微量アルブミン定量

69 13歳の男子。右膝痛を主訴に来院した。2か月前に体育の授業中にジャンプした際、右膝に痛みを感じたが放置していた。1週後に受診した近医で成長痛と言われ様子をみていたが、歩行時の痛みが続くため精査目的で紹介された。既往歴・家族歴に特記すべきことはない。身長150 cm、体重43 kg。右膝の近位に腫脹と圧痛とがあり、右膝関節可動域は 10° ～ 120° である。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球510万、Hb15.5 g/dl、白血球8,400、血小板32万。血液生化学所見：尿素窒素17 mg/dl、クレアチニン1.1 mg/dl、尿酸7.0 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST30 IU/l、ALT36 IU/l、LD(LDH)344 IU/l(基準176～353)、ALP1,824 IU/l(基準115～359)、Ca9.2 mg/dl、P3.0 mg/dl。CRP1.1 mg/dl。胸部エックス線写真に異常を認めない。右膝のエックス線写真(別冊No. 15A、B)と骨生検のH-E染色標本(別冊No. 15C)とを別に示す。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 持続洗浄
- c 病巣搔爬
- d 広範切除術
- e 関節固定術

別 冊

No. 15 A、B、C

70 68歳の女性。うつ気分と左半身の脱力感とを主訴に来院した。2年前から左手足の動かしにくさが出現した。次いで、うつ的となり意欲も低下してきた。近医を受診しうつ病と診断され治療を受けた。その後、左手足の脱力感が増強した。糖尿病と肺気腫との既往がある。意識は清明。体温 36.0℃。脈拍 80/分、整。血圧は仰臥位で 150/86 mmHg、起立位で 112/60 mmHg。表情と自発性に乏しい。見当識と認知機能とに異常を認めない。発語は小声で、左上下肢に固縮、両側上肢に軽度の企図振戦を認める。四肢の腱反射は低下しているが、左右差を認めない。歩行は失調性である。血液所見と尿所見とに異常を認めない。頭部単純 MRI の FLAIR 像(別冊No. 16)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a Pick 病
- b Parkinson 病
- c 線条体黒質変性症
- d 皮質基底核変性症
- e 進行性核上性麻痺

別 冊 No. 16

71 27歳の初妊婦。妊娠35週。妊婦健康診査時に異常を指摘され入院した。双胎妊娠であったが、経過中の胎児発育は順調で両児間に体重差を認めず、子宮頸管長は35 mm前後であった。母体血圧は120～130/68～84 mmHgで推移していた。入院当日の尿所見：尿蛋白1+。血液所見：赤血球340万、Hb8.6 g/dl、Ht28%、白血球8,600、血小板8.2万。軽度の上腹部痛と10～15分間隔の不規則な子宮収縮とを認めた。入院後の血圧は148/92 mmHg。尿所見：尿蛋白1+、沈渣に赤血球多数/1視野。内診で子宮口は1 cm開大で胎児先進部は児頭である。超音波検査で胎児推定体重は第1子2,360 g、第2子2,300 gでいずれも頭位である。

次に行うのはどれか。2つ選べ。

- a 胎児心拍数陣痛計の装着
- b 血液生化学検査
- c 降圧薬の投与
- d 子宮収縮抑制薬の投与
- e 輸血

72 2歳の男児。白血球増多と血小板減少の精査のため入院した。4日前から38℃以上の発熱と下痢のため近医で治療を受けていた。症状は改善傾向にあった。意識は清明で活気がある。身長83 cm、体重11.8 kg。体温37.2℃。脈拍124/分、整。血圧100/56 mmHg。頸部に径1 cmのリンパ節を数個触知する。心音と呼吸音とに異常を認めない。右肋骨弓下に肝を4 cm、左肋骨弓下に脾を3 cm触知する。血液所見：赤血球 443 万、Hb11.6 g/dl、Ht34%、白血球21,300、血小板9.6 万。血液生化学所見：総蛋白5.8 g/dl、アルブミン3.2 g/dl、尿素窒素3.0 mg/dl、クレアチニン0.2 mg/dl、尿酸4.1 mg/dl、総ビリルビン0.4 mg/dl、AST423 IU/l、ALT586 IU/l、LD(LDH)1,059 IU/l(基準260~530)。CRP0.9 mg/dl。末梢血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 17)を別に示す。

病原体として考えられるのはどれか。2つ選べ。

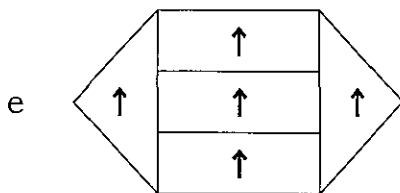
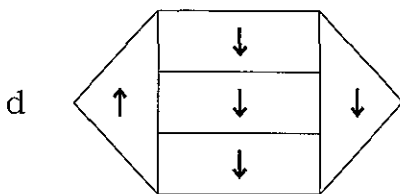
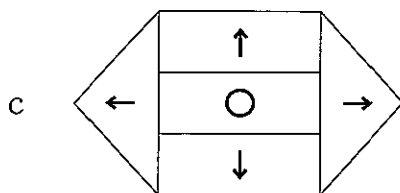
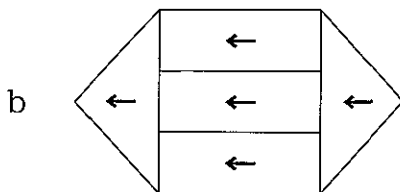
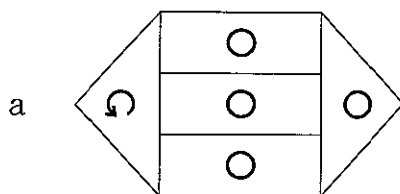
- a EBウイルス
- b アデノウイルス
- c エコーウイルス
- d サイトメガロウイルス
- e インフルエンザウイルス

別 冊

No. 17

73 43歳の男性。めまいのため搬入された。6日前から微熱がありのどが痛く、風邪だと思ったが放置していた。今朝、目が覚めたら天井が回る感じがして、立ち上がると倒れそうになった。寝ていてもめまいが強く、吐き気があり、動けない状態になった。意識は清明。体温 36.8℃。脈拍 76/分、整。血圧 140/84 mmHg。難聴はなく、眼振を認める。眼球運動に異常を認めない。頭部単純 CT で異常を認めない。

この患者で見られる眼振はどれか。



74 51歳の女性。難聴と耳漏とを主訴に来院した。25年前から時々耳漏があったが放置していた。5、6年前から徐々に難聴が増悪し、耳漏を繰り返すようになった。側頭骨CTで乳突洞の発育は抑制されているが、骨破壊は認めない。右耳の鼓膜写真(別冊No. 18A)とオーディオグラム(別冊No. 18B)とを別に示す。

治療として適切なのはどれか。

- a 鼓室形成術
- b 中耳根治手術
- c アブミ骨手術
- d 人工内耳埋込術
- e 鼓室換気チューブ留置術

別冊 No. 18 A、B

75 56歳の男性。大腿骨腫瘍で入院治療中。早朝離床時に突然の胸痛と呼吸困難とを訴えた。体温 37.0℃。呼吸数 28/分。脈拍 120/分、整。血圧 90/64 mmHg。呼吸音に異常を認めない。血液所見：赤血球 520 万、Hb16.2 g/dl、Ht48%、白血球 11,600、血小板 19 万。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.48、PaO₂ 55Torr、PaCO₂ 32 Torr。胸部エックス線写真(別冊No. 19A)と胸部造影 CT(別冊No. 19B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 肺結核
- b 大動脈解離
- c 肺血栓塞栓症
- d リンパ節転移
- e サルコイドーシス

別 冊 No. 19 A、B

76 58歳の女性。突然の強い胸背部痛のため搬入された。8年前から高血圧の治療を受けていたが、降圧薬を飲み忘れることが多かった。意識は清明。顔面は苦悶様で冷汗を認める。血圧は右上腕で170/110 mmHg、左上腕で150/70 mmHg。心音と呼吸音とに異常を認めない。胸部造影CT(別冊No. 20)を別に示す。CT室から帰室後、意識レベルの低下と血圧の低下(右上腕で70/52 mmHg)とを認めた。

対応として適切なのはどれか。

- a 緊急手術
- b 胸腔ドレナージ
- c 心臓カテーテル検査
- d ICU管理下での内科的治療
- e 大動脈内バルーンパンピング

別 冊

No. 20

77 56歳の女性。皮膚掻痒感を主訴に来院した。3年前の健康診断で肝機能異常を指摘されたが放置していた。輸血歴はない。服薬歴に特記すべきことはない。飲酒は機会飲酒。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球 340 万、Hb 11.6 g/dl、血小板 14 万。血液生化学所見：総蛋白 7.7 g/dl、アルブミン 4.2 g/dl、総ビリルビン 1.8 mg/dl、AST 56 IU/l、ALT 65 IU/l、ALP 935 IU/l (基準 115~359)、 γ -GTP 616 IU/l (基準 8~50)。免疫学所見：HBs 抗原陰性、HCV 抗体陰性。肝生検組織の H-E 染色標本(別冊No. 21)を別に示す。

診断に最も有用なのはどれか。

- a 抗核抗体
- b 抗 DNA 抗体
- c 抗 RNP 抗体
- d 抗平滑筋抗体
- e 抗ミトコンドリア抗体

別 冊

No. 21

78 28歳の2回経産婦。妊娠35週。交通事故による腹部打撲のため搬入された。意識は清明。体温 37.2℃。脈拍 92/分、整。血圧 120/80 mmHg。胎児心拍数 90 bpm。痛みを伴う持続的な子宮収縮と性器出血とを認める。

最も考えられるのはどれか。

- a 早産
- b 子宮破裂
- c 前置胎盤
- d 絨毛膜羊膜炎
- e 常位胎盤早期剥離

79 80歳の男性。右眼の視力低下を主訴に来院した。約2年前から縦の線がうねって見えることに気付いていた。3か月前に急激な視力低下をきたし、硝子体出血の治療を近医で受けたが改善しなかった。5年前から糖尿病と高血圧とを指摘され治療を受けており、1年前から不整脈が発生し抗血小板療法を受けている。視力：右手動弁/30 cm(矯正不能)、左0.8(矯正不能)。前眼部、中間透光体所見：両眼に軽度の白内障を認めたが、角膜、前房および隅角には異常を認めなかった。右眼の硝子体に強い混濁を認めた。血液所見：赤血球350万、Hb11.0 g/dl、Ht33%、白血球4,230、血小板13万。血液生化学所見：血糖145 mg/dl、HbA_{1c}7.2%、総蛋白6.3 g/dl、アルブミン4.0 g/dl、尿素窒素20 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、Na142 mEq/l、K4.7 mEq/l、Cl107 mEq/l。右眼の硝子体切除術を施行した。混濁した硝子体を除去すると網膜下にも出血があり、出血は黄斑部を含んで下方に広がっていた。手術後3日の右眼(手術眼)の眼底写真(別冊No. 22A)と左眼の眼底写真(別冊No. 22B)とを別に示す。

硝子体出血の原因として最も考えられるのはどれか。

- a 脳動脈瘤
- b 加齢黄斑変性
- c 糖尿病網膜症
- d 高血圧性網膜症
- e 薬剤性血小板減少症

別 冊 No. 22 A、B

80 28歳の男性。めまいと嘔気のため搬入された。1か月前から微熱を自覚していた。今朝から回転性のめまいと嘔気とが持続している。体温37.8℃。脈拍96/分、整。血圧122/58 mmHg。胸骨左縁第3肋間に拡張期雑音を聴取する。水平性の眼振と構音障害とを認める。眼底に小出血斑を認める。血液所見：赤血球413万、白血球10,200。CRP6.6 mg/dl。頭部単純MRIのFLAIR像(別冊No. 23 A、B)を別に示す。

まず行うのはどれか。2つ選べ。

- a 血液培養
- b 冠動脈造影
- c 心エコー検査
- d 頸動脈超音波検査
- e 抗リン脂質抗体測定

